

おんけいしん

神學博士 稻垣陽一郎講

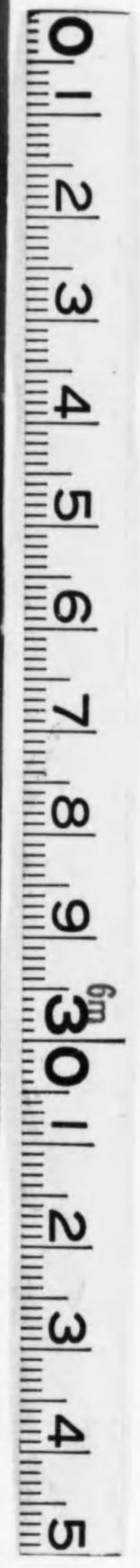
文信仰再
庫建

第七輯



アタナシオ會發行

211
特223
591



始



イエス・キリストの降生は二の結果を、人類の歴史に齎らした。「恩恵と真理とはイエスキリストによりて來れるなり」(ヨハネ一ノ十四)

一は「真理」の啓示である。真理とは神と救に關する一切の智識である。イエス・キリストは我は真理なりと仰せたまふた(ヨハネ十四ノ六)。真理と自身とを同一視したまふた。即ち真理の至上完全なる啓示者なりとのことである。無形の真理は有形のイエス・キリストによりて體現せられたることである。「真理」を知らんとせば、イエス・キリストを知ればよきこととなつた。

二は恩恵の施設である。

教會は此世に在りては、イエス・キリストによりて成就せられたる救贖に與かる手段の設備せられたる神立の機關として立て居る。即ち教會は「救のホーム」である。我らの救に必要な神の「恩恵を受くる方法」は此に設備せられて居る。此に神の召を受け、相當の手續を経て、使徒の後繼者たる監督の按手を受けし聖職によりて、キリストが救に必要なりとして立てたまひし聖奠が行はれて居る。人はこれによりて、神の恵に與かる。

右の二の内、一は公會の信仰に關する方面にして、他は教會の施設に關する方面である。此兩方面を正當に理解して、初めて我らは正常なる聖公會員としての信仰生活を送り得る。

本講は此兩面を闡明せんと試むるものである。

第一講 真理の連環

一、言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり(ヨハネ一ノ十四)

基督教眞理は連環を爲せるもの故、一を他より離し得ない。一を信すれば、他をも信ぜねばならぬ。若し其一を誤らば、延て他をも誤る恐がある。

基督教の中心的眞理はもとより「キリストは肉にて顯はされたまへり」(テモテ三ノ十六)——「言は肉體となりて、我らの間に宿れり」(ヨハネ一ノ十六)。とのことである。此絶大なる事件は人間の歴史に前後唯一回生じた。一回以上ある筈もない。此事實を中心として、紀元は前後に分たれて居る。

勿論、此種の非常にして絶大なる事件は、普通、人が世に出る方法にて實現せられやうと思はれない。イエス・キリストの誕生に奇跡分子の存するはむしろ自然である。若しイエスはヨセフとマリアの普通の子ならんには、新約聖書がイエスに歸する如き、位地と價值、又教會がイエスに歸するが如き尊嚴を歸することは不可能である。さればとてこれが爲に蹟く必要はない。神の作爲には徒費はない。神は常に最善を行ひたまふ。若し人類救済の爲に、神が人間の歴史に入り來りたまふに當りて、他の方法ありしならば、神は其方法を採用したまふであらふ。されど全智にして全能の神が、歴史上實

際に爲したまひし所は、聖靈によりて處女が孕り、「月満ちて」嬰兒が生るることにありしとせば、これを以て最も好適なりと思召したまひしことは明白である。

根本の點は神が果て此種のことを爲したまふことを必要とせしや否である。若し神が必要なりと思召したまひしとせば、神の採りたまひし手段につまづく必要はない。

主は人を救はんが爲に人となりたまふとき

處女の胎をも厭ひたまはさりき(讚美頌)

若し「處女産」——イエスは處女母より生れたまへることに躓くとせば、見地上、二の缺陷があるからである。一は原則上、本末を顛倒するからである。インカーネーションは根幹である。處女産は枝葉である。「處女産」ありてインカーネーションが生じたのでない。インカーネーション實現の必要上、「處女産」が其手段として神によりて採用せられしに過ぎない。

他は實行上、聖靈の干渉を念頭に置くことを忘れるからである。單に處女が孕りて子を生んだのでない。然ることは恐らくあり得ない。又誰も信することはできないであらう。イエスの誕生の場合には「聖靈に由りて胎」たのである。「聖靈なんちに臨み、至高者の能力、汝を被はん」(ルカ一ノ三五)と處女は御告を受けた。聖靈は生命の賜主である。聖靈が處女に臨みたまひしとは、生命の發動である。

其結果、懷孕が行はれたとすれば、何ら特に奇異とするに及ばない。世に人の生るるも畢竟生命の發動に過ぎないからである。

更に一事の注意すべきは、「處女産」に奇跡分子ありとせば、それは唯「懷孕」——處女が聖靈によりて「胎り」し點である。此點に注意せば、此問題を理解する大なる助となる。一旦「胎りて」のちは正規の経過をとり、「月満ちて」嬰兒は世に生れた。然らば「處女産」を奇跡なりとするも、其全部にあらずし、唯其初部——懷孕にありしことを注意すべきである

(註) 稻垣陽一郎「救主は處女より生れたまひしや」(本文庫第二輯)参照

(一) インカーネーションは神の人類救済のドラマの中心である。これが爲には、舊約時代の長日月に亘れる準備があつた。これはやがて救主はロマに生れず、ギリシヤに生れず、支那、印度、日本に生れずして、ユダヤ人に生れたまひしことを説明するものである。

(註) 故ゴア監督は「キリストの神性」中にいふ「神はむかしは預言者等により、多くに分ち多くの方法をもて先祖たちに語りたまひしが、この末の世には御子によりて、我らに語りたまへり」(ヘブル一ノ一)。これは神の特殊の自己表現、自己啓示である。聖書の記録する所は、即ちこれである。このことは極めて狭き徑路によりて與へられた。然れどもこれは普遍的目的の爲であつた。これは一小國民——殆んど何ら取るに足らざるが如きイスラヘル民族を通じて與へられた。されどこれはイエス、キリストによりて、其絶極に達し、普遍的目的の爲に役立つこととなつた。これは全世界のものが、満足を見すべき(善意をもつ場

合) 宗教となつた。人が從來既に把握せる神に關する智識を除外するにあらず、却て既に人心に投射する所ありし部分的の光明を綜合することによつてであつた」(Bishop Gore: The Deity of Christ, P. 67)

(二) 此根本事實に關し、正當なる信仰を懷くことは肝要である。基督教信仰正解の鍵が此にある。此中心眞理を正解せば、他のこれと關聯せる眞理を正解することとなる。されど一旦此點を曲解せんか、殘餘の教義は皆曲解せらるるに至る。

新約聖書は此點に明答を與へ「言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり」(ヨハネ一ノ十四)とす。即ち「恩恵と眞理とに滿てる」父の獨子」が「肉體をうけ、人性をとりて」世に來りたまひしとす。神は人間の歴史に入込みたまふたのである。これは歴代公會の正しき信仰である。

(註二) 牛津のオ、イー、ゼームス博士も「近代世界に於ける基督教信仰」中にいふ「このことは(インカーシヨンの教義)「創造者」が、時間と歴史との境野にみづから入り來り、これによりて「絶對的」歴史的パースンによりて「超歴史的」のものを、歴史的のものうちにもたらしたることを意味す」(O. E. James, The Christian Faith in the Modern World, P. 50)

(註三) 英國復活教班のファザー、ソントンソントンの近時の大作「人性をとりたまひし主」にいふ。「イエスキリストは、歴史の集成せる發展上の所産でもなく、又其繼承内に立つものでない。イエス、キリストは遙か彼方より歴史に入込んだのである。イエス、キリストは單に神に對する人間の最高の應答、救贖的活動に於ける最高の使用人ネーゼントでない。イエス、キリストによりて、神の絶對的現實性が歴史上の過程

に協入したのである」(一一三頁、一六四頁)(L. S. Thornton, The Incarnate Lord, P. 164)

新約聖書はこのことを「取る」といふことによりて記載して居る。「彼は神の貌にて居たまひしが」
「僕の貌を取りて人の如くなれり」とす。此人の貌をとりたまひし瞬間より、御子の地上に於ける人間生活——人間の條件と、人間の制限の下に、人間としての機能と經驗が初まつた。但し人間に見る罪はなかつた。罪は本來人性に固有のものでないからである。人間は初より罪性を具へて此世に現はれたのでない。これは後の附加物——人間が與へられし自由を亂用せし結果たる有害なる附加物である。されば神が人性をとりたまふに當りて、罪の性を帯びたまふことはなかつた。加之、若し一點にても、罪ありとせば、御子の世に來りたまひし目的たる人類の罪の贖主たり得ないからである。

かくて御子は其人性に於て、あらゆる謙卑と苦難を経て、遂に十字架の死をさへ遂げたまふた。然るにこれらの人間的經驗は、其本來の御子たることに何らの變化をも及すことはなかつた。即ち此間に一瞬間たりとも神にいますことをやめたまふことはなかつた。古典的の言を藉りていへば「神性を人性に變ぜしにあらず、神性に人性を取りたまひしなり」。「其在りし所に止りつゝ(神)其在ざりし所のもの(人)となりたまふた」のである。近代的にいへば、神格の「自我」は、同時に人性の「自我」
となることにより、神性にては神の機能を行ひ、人性にては、人の機能を行ふ妨とはならなかつた。

人となりたまふても、依然として、神にいました。其眞實に神にいますことは、其完全に人たることを妨げなかつた。

(註) アタナシオ信經にいふ(二十九―卅七)

また限りなき救に至らんが爲には、主イエス、キリストの肉體となり給ひしことを眞に信ずるは肝要なり。それ正しき信仰は神の子イエス、キリストの神また又たることを信じて言ひあらはすことなり。

神とは父の性にて萬世の前に生れ、人とは母の性にて此世に生れ給へることなり。

主は全き神、全き人にして、靈魂と人體とを備へたまへり。

その神性によれば父と等しく、その人性によれば父に劣る。

神また人なりといへとも二にあらず、唯一のキリストなり。

その一なるは神性を肉體に變ぜしにあらず、神に人性を取り給へるなり。

全く一なり。これ兩性を混ぜしによらず、唯一なるによる。

靈魂と肉體にて一の人なる如く、神と人にて一のキリストなり。

(註二) フツカーもいふ「キリストは神的にして、又人的なるパーソンなり。されど一つに二のパーソンあり

といふにあらず。神的といふは、人格的に神の御子にいませばなり。人的といふは、人間の子たる性を事

實上帯びたまふが故なり」(Hooker: Ecclesiastical Polity. V. Iiii.)

(註) 故エフ、ゼ、ホール博士は其「インカーネーション」の序言に最も力強く言明していふ。

「基督教の中心的眞理は歴史的イエス、キリストは神にして又人なりし、又現に然りとのことである全

く神たるが故に、眞に人たらずといふのでない。全く人たるが故に、眞に神たらずといふのでない。イ

ンカーネーションによりて、^{ゴット(ゴット、マンゴット)} 神格と人性とは正眞の互通に於てキリストに於て會合した。さればとてこ

れがために、人的の制限は神のものによりて遮害せらるることなく、又神のものは人的のものによりて軽減せらるることなかつた」(F. J. Hall: The Incarnation, P. XI.)

(註三) 「要するに我らの主のパーソンは、其自體、神的であり、これと不可離的に結合せる人性と關聯して

は人的である。絶對的には、キリストは神的パーソンである。相對的には、人的パーソンである」(W. S.

Bishop. D.D.: Spirit and Personality, P. 134.)

故に新約聖書には、イエス、キリストを以て、神の内住の絶極なりとする思想の片影をも認めない。

神は人に宿りたまふ。イエス、キリストの場合には特別に宿りたまひしが故に、かくの如き人格となりしなりとして居ない。或はイエス、キリストは神のインスピレーションの至上の一例なりとするが

如き痕跡もない。神は人にインスピレーションを與へたまふ、されどイエス、キリストの場合には、

極度に然か爲したまひしが故に他に比類なき人格を見るに至るのであるとして居ない。更にイエス、

キリスト純然たる人たりしが、神のめぐみによりて、次第に神らしくなり、遂に神とせらるるに至り

しとする所謂神化思想の形跡は毫末もない。

新約聖書のキリスト評價は「神の満ち足れる徳は形體を爲してキリストに宿れり」(コロサイ二ノ九)

「御子は神の榮光のかゞやき、神の本質の像」なりとす(ヘブル一ノ三)。

この評價はキリスト自身の主張と意識とによりて、裏書せられて居る。「我と父とは一なり」我を見

しものは父を見しなり」我によらでは、誰も父の御許にいたるものなし」(ヨハネ十四ノ六)
従て公會の禮拜に於ても、イエス、キリストは「眞なる唯一の御子」主は父の永遠に在す御子なり」とす。

イエス、キリストは神の至上の啓示、神の愛の最高の表現なりとするは、實に此確信に基くものである。

「汝、キリストに就て如何に思ふや」との疑問は、今日尙眞面目に反覆せられつゝある疑問である。若し以上の點——基督教眞理の出立點にして、明確に理解せられ、確信せらるるにあらざる限り、我らは一步も前進し得ない。前進すべき理解と信仰の基礎がいかならである。

若し此種の方法以外に、人間の宗教的要求に應じて、おのれを人に示し得る方法ありとせば、神はそれを取りたまふたのであらう。然るに所詮「人格性」は人間のもてる最上の範疇である。人間は人格的の神によりて、人格的に造られて居る。従つて神がおのれを人間に示したまふに當りて(新約聖書のいふが如く)人性を取りたまひしとすれば、これほど至當にして、自然のことはない。かくすることによりて、神は人間の歴史に入り、人間の經驗に入り來りて、神と人との間の生ける接觸は、最も如實に、最も具象的に體驗せらるることとなつた。

故に新約聖書は、イエス、キリストを以て、神の眞像なりとし「神の満ち足れる徳は、悉く形體を爲して、キリストに宿れり」(コロサイ二ノ九)とす。従てキリストの教は神の教、キリストの業は、神の業、キリストの愛は神の愛であつた。キリストを知るは、神を知るのであつた。キリストに近くは神に近くのであつた。要するに『キリストの一切の經驗は、人間性に於ける神の經驗であつた。』

此點に於て我らは端りなくも施洗者ヨハネの疑問を想起せしめらる。マケラスの城獄に幽閉の身となりし施洗者ヨハネは、イエス、キリストの出現と、其評判とを耳にして、一日使を其許に遣はし『來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか』と問はしめた。此問は今日にても、イエス、キリストは果して基督教の唱ふるが如くに、人類の救主にいますか、或は他にこれを求むべきかと惑ふ者の問ふ所である。若しイエス、キリストにして、預言者の最も大なるものなりとするも、或は聖徒の最も優れたるものなりとするも、唯それに過ぎずとせば、我らは「他に待た」ねばならぬ。イエス、キリストと同様のもの、若くは、イエス、キリスト以上の者が、後に出で來ることなしと限らないからである。何故となれば「若しイエス、キリストにして、其究極の點に於て、一個の人間的人格、即ち無數の人間中の一人に過ぎずとせば、事態上、此種の過程が反覆せられ得ざる理由はない。畢竟、これはいづれの善人の場合にも、相當に生ずることの最上の例に過ぎざることとなる」からである。

若しイエスはマリアより生れたまひしとき、初めて一の人格として、其存在を初めし人物に過ぎずとせば、假令、如何に神と親密なる交ありしにせよ、又如何に豊富に神よりのインスピレーションを受けしにせよ、此種のイエスを以て、人間歴史上、神の最高、最上、唯一の啓示者なりと要求する權はない。他日、他所にて、他の者が、イエス以上に神の恩恵とインスピレーションを受けて、人間の救主として出現せずとも限らない。而かも若しイエス、キリストにして、人間歴史上、神の最高最上の唯一の啓示者にてあらざる以上、基督教を以て神の最高最上の啓示を有する宗教なりと主張し得ない。然るに神を完全に——有儘に啓示し得る者は、本質上、神にてゐます者の外にあり得ない。

(註)故ゴア監督はいふ「言が肉體となりし」者に含まれることにも勝りて、此世に於て一層完全に、かつ一層充分なる人に對する神の自己啓示もなく、人と神との關係もない。此に最高のものと最低のものとは絶對に一となつた。神に關して推量し得ざる困難なる事は、此に諒解し得らるべき人間の性格の外貌に移化せられた。此に人間の生活は道德的にも、又靈的にも、其最上の状態に達した。キリスト、イエスは正さに来るべきものにていました。キリスト、イエス以外のものを待ち望むことは無意義である。キリスト、イエスの信仰は最終の宗教である。(C. Gore: The Deity of Christ. P. 63)

「若しキリストにして、人格的に、人性に於ける神にていままさずとせば、其竟極性を主張する何らの眞の根據がない。唯然るとき、然るときにのみ、キリストは本質的にかつ必須的にかつ竟極的であらねばならぬ。何

故となれば(少くとも此世の事情の下にありては)「言」が肉體となりしキリストによりて與へられしよりも勝りて充分なる人性に於ける神の表現も、神に於ける人性の表現もあり得ないからである。又事體上、他のキリストもあり得ない。又神の生みたまひし獨子といふが如き人物も他にあり得ない」(Bishop Gore: Belief in Christ. P. 214 稻垣隆一郎譯「キリストへの信仰」三三三四頁参照)

二、「我もし地より擧げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん」(ヨハネ十二ノ三二)

神の經綸よりせば、神が人性をとりて、世に顯はれたまひしことは、萬民の罪の贖の爲に、十字架上に死を遂ぐることに伴はるべくあつた。「ベツレヘム」は「カルバリ」を豫期して居る。

(一)此點に於て、第一に注意すべきは、イエス、キリストの十字架上の死に對する企圖である。『人の子の來れるも、多くの人の贖償として、己が生命を與へんが爲なり』(マルコ十ノ四五)と、我らの主イエス、キリスト仰せたまふ。『キリスト、イエス、罪あるものを救はんが爲に世に來りたまへり。これすべての受くべき人の眞の言なり』と聖徒パウロもいふ(テモテ前一ノ五)。

受苦日の特禱はよくこれを示して居る。

「主イエス、キリストは、此家族を救はんが爲に、甘んじて、裏切られ、悪人の手に付され、十字架の上に殺されたまへり」(祈禱書一九五頁)

他人が後に、イエス、キリストの死に贖償の意義を附してたのでない。これは十字架上に死を遂げた

まひし主自身の當初よりの企圖である。死なんが爲に、此世に來りたまふたのである。十字架の陰影は、主の地上の生涯に纏綿して居た。これは次第に濃厚となりて、ゲツセマネの祈となり、遂にカルバリの丘に實現した。若し此企圖なかりしとせば、單に外觀よりすれば、偶然其場に來合はせし者にとりては、カルバリの丘上に立ちし三基の十字架中、其中央のものと、其左右にありしものとの間に何らの區別を認め得なかつたに相違ない。

(二)さりとして何人にも唯十字架の上に死にさへすれば、それにて人間の罪の贖となり得るといふことはない。其死が『多くの人の罪の贖償』なりといふ爲には、其死を遂ぐる人格が、かくの如き資質を備へしものであらねばならぬ。此に於てキリストのバーソンに關する眞理の第一環に戻て來らねばならぬ』イエス、キリストの十字架上の死は萬世に亘りて、萬民の罪の爲の贖償なりといふのは、畢竟其死を遂げたまひしキリストは、其人格の出所上、正に此種の資質を備へて居たまふたからである。これは公會の禮拜に於て誦する所である。

「主は永遠にいます御子なり。主は人を救はんが爲め人となり……死の苦に勝ちて、凡ての信徒の爲に、天國の門を開きたまひぬ」

從て其死は「多くの人の罪の贖償」となり得るのである。

「神は愛なり」神は其愛よりして人の滅ぶることを好まず、救はるることを喜びたまふ。然るに罪は其本質上、神に對する人間の反抗である。造主に對する造られたるものの背反である。此狀勢の撤廢せられざる限り、神と人との間に眞の親和があり得ない。罪の贖は必要なりとはこの意味である。「罪の價は死なり」さりとして此贖は罪ある人間によりて達成せられ得ない。たとひ人間中の至聖至善なるものといへども、尙罪性を帯びたる一個の人間に過ぎないからである。これは人間を造りたまひし神に於て、初めて可能のことである。さりとして神は神たる以上死ぬることはできない。かくて神は其取りたまひし人性——イエス、キリストの人性に於て——十字架上に死を遂ぐることによりて、贖罪を完成したまふた。

(三)同時にイエス、キリストの性格は、絶対に無垢無罪なりしことも、其贖罪と密接なる關係がある。

新約聖書によれば、イエス、キリストには罪性はなかつた。「主には罪あることなし」、これは勿論其超自然的なる出生と關聯して居る。「聖靈の動作によりて、其母、處女マリヤより生れしめ、眞の人性を具へたまへり。これ其罪の汚れなきを以て、我らの罪を悉く潔めん」が爲であつた。一點にても罪ある者は、人類の爲に罪の贖主となり得る筈はないからである。

イエス、キリストには罪の意識はなかつた。罪を悔み、罪を懺悔したまひし形跡はない。人の罪を赦したまひしことそあれ、自身には罪の自覚はなかつた。

イエス、キリストには罪の経験はなかつた。これは世の聖徒聖人と全然其類を異にして居る。聖潔に進めば進むほど、罪感いよく深刻となり、これが爲と苦み悩むは人の常である。聖徒パウロすら我は罪人の首なりと告白して居る。然るにイエス、キリストには毫末も此種の経験はなかつた。却て「誰か我を罪に定め得るぞ」と大膽に挑みたまふた。人間歴史上、此種の挑を爲せしものは、前後唯イエス、キリスト一人のみ。

されば我らの主イエス、キリストの十字架上の死は、(一)其固有の人格よりするも、(二)其無垢無罪の性格よりするも、(三)其死を以て「多くの人の贖償」たらしめんとしたまふ意志よりするも、萬世に亘り、萬民の罪の贖たることは明である。

「神はキリストに在りて、世をおのれと和がしめたまへり」(コリント後五ノ十九)とは即ちこの意味である。信仰と悔罪とを以て、これを受認するものにとりては、尙罪と惡との存するに係らず、イエス、キリストによりて達成せられたる贖罪によりて、世は既に恢復せられたる樂園——復樂園である。かくてクリスマス後に十字架があつた。眞理の二の環は相連て居る。

三、「何ぞ死にし者どものうちに生ける者を奪ぬるか」(ルカ二四ノ六)

「主、實に甦りたまへり」。ベツレヘムあれば、カルバリあり、カルバリの後には、ヨセフの園に空虚となりし御墓があり、甦りたまひし主は弟子等に現はれて其活在を證したまふた。これは眞理の第三環である。

マグダラのマリヤは香料を整へ、イースターの曉に、我らの主の御墓を訪ねて、其御屍を見ずして訝かつた。「生命の君」にて在すものを「死ねる者ども」のうちに尋ねんとしたからである。後に「彼は此に在さず、甦りたまへり」と知つた。主が十字架上の死に就て預め屢弟子たちに警告したまひしとき、必ず附言して『三日目に甦るべし』と仰せたまひしことが實現せられたのである。而かもこれは充分に検討せられ、證明せられたる事實である。

(註)稻垣陽一郎「主、實に甦りたまへり」(本文庫第二輯)参照。

公會の信經は主は「三日目に死にしものうちより甦りたまへり」といひ、又復活主日の特禱には

「主は獨の御子イエスキリストを以て、死に勝ち、限りなき生命の門を開きたまへり」(二〇五頁)といひ、復活後第一主日特禱にも

「主は獨の御子を與へ、我らの罪の爲に死なしめ、又われらの義とせられんが爲に、甦へらしめたまへり」(一一三頁)とある。

我らの主イエス、キリストの復活に關しては、三四の注意すべき事項がある。

(一)復活と關聯せる空墓——イースターの曉に空墓となりし主の御屍を葬れる御墓である。實際キリストの復活に關する新約聖書の記事は、空墓を以て始て居ることは、注意すべきである。空墓は教會の初代より今日に至るまで、キリストの復活の主要なる保證なりとせられて居る。これは又文獻的に充分の證明を経て居る。假りに福音書の記事は、細目の點に於て、多少の相違ありとするも、空墓に關しては一致して居る。現にマグダラのマリヤと其他の婦人らが、香料を携へて、御墓に到りしに其目的を達し得ざりしは、御墓が空墓であつたからである。又婦人等の報知に接して、急ぎ御墓に往きしベテロとヨハネの中、後者は大膽に墓中に入りて、檢分して「これを見て信ず」(ヨハネ廿ノ八)。尙、未だ復活の事實を信するに至らざりしも、御墓の空墓なりしことを信じた。

更に空墓のことは、復活後のキリストの顯現が弟子等によりて、實驗せられざる以前に確認せられて居ることを見落てはならぬ。順序は(一)御墓の空墓なることが先づ發見せられた。(二)而て後に復活したまへる主イエス、キリストの顯現が經驗せられた。此順序は顛倒してはならぬ。復活後の主の出現ありし爲、御墓は空墓であらねばならぬと推論したのではない。復活後の主の出現を以て、弟子の心中に見し一種の幻影なりとし、「空墓」は何ら事實上の根據のなき神學的推論なりとすることは許

るされない。

加之、空墓と復活とは當時ユダヤの宗教觀念に連結せられて居た。當時の復活に關する觀念によれば、復活には空墓は必須の條件とせられてあつた。墓の空墓ならざる復活とは當時のユダヤ人には考へられなかつた。(註。(ダニエル十二ノ二)『地の下に睡り居る者の中、衆多の者をさまさん……』)

從てラザロの甦へらせられしときも、本人は墓より出て來た(ヨハネ十一ノ四四)。

キリストの教説にも『墓に在る者、皆神の子の聲をきゝて出で來らん』とある。此種の教説は復活は身體をして、死後一種高等なる存在の状態に適應せしむとの信仰を抱かしめたであらふ。

空墓は又意氣沮喪せる弟子らをして、確信を抱かしむる爲に必要であつたであらう。當時の弟子らの心的状態は主復活せりときゝても、現に御屍が墓中に尙横はり居ては之を信じ得なかつたに相違ない。故に復活を信する前には『空墓はガリラヤの弟子らにとりては必須の假定であつた』(スバローン・ムツブソン)

空墓の弟子らに知らるるに至りしは、充分に調査せられ、而て後に確認せられる事實にして、復活の性質よりせし神學上の推論でない。主、甦りたるが故に墓は空墓にてありしと推論せしにあらず、墓は空虚なりし故、主は甦へりたまへりと確信するに至つたのである。

勿論、墓は空虚なりしとのことは必ずしも復活を證明するものでないかも知れない。單に空墓のみにては十字架の死と、敗北の如くみえし所のものを一變して、勝利と榮光の幻影を生ぜしめ得ないであらふ。されど空墓は事實であつた。事實なりとせば恐らく説明は唯二つあるのみ。(一)之を以て人間の所業とするか、(二)之を以て神の所業となるか。即ち人間の手によりて運び移せしか。將又、大能の御手によりて甦へらせられしか。

消極的批評は前者を取らんとするも、其推論一も首肯に値するものはない。唯新約聖書のいふ所のみ此事の真相を解く。「潔き靈によれば、死人の復活によりて大能をして神の子と定められたまへり」(コリント四十一……)

(參照)T. B. Strong: The Miracles in Gospels and Creeds, pp. 12—14,

F. J. Hall, The Passion of Christ, pp.

Salmond: The Christian Doctrine of Immortality, p. 332

二、「三日目」に復活の生じたことである。

「三日目」とは、我らの主が十字架上の最後の呼吸の終りしときより、其復活に至る期間を意味す。

一、「三日目」に關する最古の傳説は、聖徒パウロが、エルサレムのクリスチアン團體より受けし所のものにて、コリントの信徒に贈り書にし『我が第一に汝らに傳へしは……三日目に甦へり……』

(コリント前十五ノ三、四)とある。彼は「三日目」にイエス、キリストの復活のありしことを舊約聖書より抽出せず、却て之を「傳」よりせりとす。即ち其回心後三年にして、エルサレムに上京の際復活の事ありし實地にて、復活に關する本來の目撃者たりし聖徒ペテロより傳達せられたる事項である。これによりてエルサレムの教會にては、當時、復活は死後「三日目」に起りしと教へ居りしと解すべきである。現に聖ペテロ自身も其演説中に『神は之を三日目に甦らせ、かつ明かに現はしたまへり』といひしと記録せられて居る(使徒行傳十ノ四十一)。

かく此聖徒パウロの證明は、初の三福音書よりも遙かに古い。従て「三日目」とは、福音書に根據せるものにあらずして一個獨立の證明である。故に一層有力である。

(二)福音書の記事によれば、主は管に甦るべしと仰せたましひのみならず、「三日目」に其事あるべしと豫告せられたとして居る。(マタイ十二ノ四十、マルコ八ノ卅一、十ノ三四、ルカ十八ノ三三、三四、ヨハネ二ノ十九、二二、二二)

加之「三日目」は、弟子によりても敵によりても、屢引用せられて居る。十字架上の強盜の嘲弄のうちにも『あゝ、宮を毀ちて、三日目のうちに建つる者よ、己を救へ』(十五ノ一、九、卅、マタイ二七ノ四十)とあり。祭司長らのピラトへの訴にも、『主よ、彼の惑す者、生きて居りし時、「われ三日の後、

甦へらんと言ひしをわれら思ひ出せり。されば命じて三日に至るまで墓を固めしめ給へ』とある（マタイ二七ノ六三）。

エマオ途上の旅人の會話にも、『然のみならず、此事のありしより今日ははや三日目なるが……』とある（ルカ三ノ二一）。

（三）福音書記者の復活に關聯せる時日の記事も、亦「三日目」を確定す。（イ）四福音書とも墓參は安息日後の第一日にありしとするに一致す。（ロ）十字架刑は安息日の前日に生ぜしことは明白である。

（マタイ廿八ノ一、マルコ十六ノ二、ルカ十六ノ二、二四ノ一、ヨハネ廿ノ一）。（ハ）安息日は此兩事件の中間にありしと明言せられて居る（マルコ十六ノ一）。

（四）「三日目」は又「主日」の設定によりて、不磨的に歴史に印刻せられて居る。

聖徒パウロはコリントの信徒に對し、聖徒たちの爲に寄附することに就て、出書せるとき「一週之首の日ごと」に之を貯へ置けと云て居る。而かも其何故に特に此日を指定せるかに就ては、其理由を與へて居ない。恐らくコリントの信徒には、此種の説明は不用であつたであらふ。使徒行傳も亦「一週之首の日、われらパンを擘かんとて集りしが、パウロ……語り（トロアスにて）續けたり」と記し。黙示録の記者も亦曰ふ「われ主日に御靈に感じむたるに」とある。（一ノ七（註）之は「主日」なる名稱の最古のもの

ならん）。

これらは使徒時代に日曜日が「主日」として守られし明證である。かく禮拜の日が一週の最終の日より、一週之首の日に移されたる原因は如何。畢竟これはわれらの主が、死人のうちより「三日目」に甦りたまひしと使徒らが確信せしによるのみ。これは聖徒パウロが、一週之首の日を特に選びたる理由を、コリント人に告ぐる必要なしとせし所以であらふ。

（五）加之、ユダヤの俗説によれば「靈魂は死後、三日目まで墓邊を徘徊して、再び其體に還らんと願ふ。されど一旦其容體變するを見るや、靈魂は全然體を去る」と。マルタがラザロは「はや臭し」といひしは、死後『四日経た』からであつた。

さればユダヤ人にとりては『三日目』は復活の日としては、死の現實なりしことを示すと共に、尙未だ「臭し」といふに至らざりしを示す。

更に死と復活との間に、或間隔を置くことは必要であつた。然らずば死の現實性に疑念を挿まるる恐れなしとは限らぬ。されど一旦死の現實性が充分に確證せられてのちはもはや猶豫すべきでなかつた。あまりに多く時日を経過せる後ならんには、キリストは其死にたまひし同じ體にて（たとひ絶大なる變化を経て、靈化せられ、光榮化せられありしとはいへ）甦りたまひしことを疑ふものなしとも

限らぬからである。

三、復活は弟子らをして我らの主の活在を確認せしめた。

主は復活後屢々、或は個人的に、或は團體的に、或は此所に、或は彼處に顯はれたまふた。かくて絶大なる變化を経て靈化せられ榮光化せられてこそいませ、靈界に靈體をもつて活在したまふことを示し、弟子をして（中には甚しく懷疑的なるトマスもあつた）充分納得せしめ、確信せしむるまで、四十日間に亘りて、此顯現が續行せられた。

イースターの物語は、徹頭徹尾、活ています主の顯現の物語である。死せる宗祖の幽靈的の出現の物語でない。さりとしてこれは弟子らの心中に生ぜし錯覺の記事でもない。活きてゐます主との接觸の記事である。「弟子たち主を見て喜べり」（ヨハネ廿ノ二）とは、其間の消息を告ぐるものである。

若し「ベツレヘム」は「カルバリ」を豫期せりとせば「カルバリ」はイースターを期待して居る。主が死人のうちより甦りたまひしとのことは、十字架上の死が、天下萬民の贖罪として神に嘉納せられし保證である。イースターはカルバリの功果の裏書である。

然るに人は今尙マリヤの如くに「死にし者どものうちに生ける者を尋ねん」とする。所謂「世界の三聖人の一人」としてキリストを見んとする。これらの「聖人」は「死ねる者どもの」に過ぎない。

これらのうちにキリストを尋ねて、キリストを見出し得る筈はない。今の多くの「イエス」傳は「死ねる」イエスの傳記である。過去の「歴史のイエス」を叙述するに過ぎない。然るに「彼は此に在らず、甦りたまへり」。福音書の記事はカルバリの記事にて終て居ない。「カルバリ」のキリストを知れるものは、イースターのキリストを知らねばならぬ。カルバリのキリストは、歴史上唯一度萬民の爲に贖罪を成就したまひしキリストである。イースターのキリストは、永遠に生きてたまふキリストである。くりすちやんとは「死ねる」イエスの傳記を讀める者を意味しない、復活後の生きていますキリストとの接觸を保つものをいふ。此接觸は信仰と悔改を以て洗禮を受くる時に始まり、聖餐に於て絶えず續行せられて居る。洗禮は單に形式でない。實に活けるキリストに有機的に連接せらるることである。聖餐は單に死せるキリストの記念の儀典に止らない。實に活ける主より「生命の糧」を賜はることである。

要するにイエス、キリストの死後の復活は其當初の降生の當然の歸結である。クリスマスあれば受苦日あり、受苦日あれば、イースターがある。基督教眞理の三環は相連りて離し得ない。

四、「われ父より出て、世に來れり。世を離れて父へ往くなり」（ヨハネ十六ノ二）

我らの主の此御言は、極めて明白にして、一點の曖昧なる解釋をも挿むことを許ささない。主は地

に在しながら、既に昇天を豫期したまふたのである。これは我らの主の人格の出所よりせば、極めて自然である。主は「われら人類の爲、又我らを救はんが爲に天より降り」たまひしとせば、其使命を成就してのちは、また其「もと居りし所」(ヨハネ六ノ六二)に還りたまふことは、極めて當然である。偉人逝き、聖人も眠る。然るにキリストには「もと居りし所」があつた。未だ世のあらぬ前に、父と偕に保ちたまひし榮光(ヨハネ七ノ五)があつた。「ベツレヘム」はキリストの地上生涯のアルファなりとせば、昇天は正に其オメガである。「ベツレヘム」は「カルバリ」の爲であつた。カルバリに「事終り」て、復活これに伴ひ、復活の後には、昇天は其當然の歸結であつた。

されば信經にいふ「主は……天に昇り、父なる神の右に坐したまへり」と

昇天日の特禱にいふ

全能の神よ、御子イエスキリストの天に昇りまし、事を信ぜしめ給へり。

昇天日聖餐感謝にもいふ。

御子は至尊き復活の後、明に使徒たちに現はれ、我らの爲に、住居を備へんとて、その眼の前に天に昇りたまへり。

これは基督教眞理の第四環である。

(一)昇天をキリストの生涯の重要事件の一として見るときは如何。

昇天のキリストは復活後のキリストと同じ主であつた。されどこれは復活後四十日間に亘りて行はれし我らの主の顯現の最後のものにして、同時に其顯現の地に於ける永久の撤去であつた。その後、人間の眼には絶対に再び御姿を拜し得ざることゝなつた。

さりながら、これを運動として見るとき、復活後の出現に比して唯其方向を異にせしのみ。復活後四十日間の出現は水平に行はれた。即ち地上に行はれた。然るに昇天に當りては、其方向は垂直であつた。即ち天を指しての上昇運動であつた。これによりて「もと居りし所にのぼる」ことを標象的に示したまふたのである。「天」といへば、おのづから上方を聯想す。況んや、舊約聖書に於ては「天」は神の寶座を寓意せるに於をや。天より降りし主の「もと居りし所」——天に「のぼり」たまふに當り、其運動が上昇的方向を取りしも自然である。

(二)我らの主の昇天は天にての活在と活動を意味した。「父の右に坐したまへり」とは勿論、標象的言表である。復活に於て靈化せられ、榮光を受けし人性を帯びて、永遠よりもちたまひし神の御子としての榮光と稜威に入りしことを意味す。これは主の祈に於ける「まだ世のならぬ前にわが汝と偕にたまひし榮光」に復歸したまふことを意味した。(ヨハネ十六ノ五) (勿論、地上の生涯に於て、人間の條件と人間の制限に従ひたまひしとはいへ、一瞬間たりとも、神としての權能を放棄したまふたので

はなかつた)

「坐す」とは或は無爲の姿勢を聯想せしむることなしとせざるも、これは昇天後のキリストは、無爲のキリストなりとの意味でない。却て昇天後のキリストは活在活動の主にいます。主は十字架の上で達成したまひし贖の功を以て、われらの爲に「父の前にあらはれたまふ」。ペブル書記者は最もよく此點を力説して居る。

(イ)昇天の主は我らの爲の取成主とりたうろしにいます。「彼は永遠に在せば、易ることなき祭司の職を保ちたまふ」(ヘブル七ノ二七)。

(ロ)昇天の主は恩恵の本源にいます。「我らの大祭司は我らの弱きを思ひやること能はぬものにあらず、罪を外にして、凡ての事、われらとひとしく試みられたまへり。この故に我らは憐愍を受けんが爲はた機に合ふ恵を得んが爲に、憚らずして、恵の坐に来るべし(ヘブル四ノ十五、十六)。

これは死せるキリストではない。生きて働きたまひつゝあるキリストにいます。主は其御靈たる聖靈にて作動したまふ。

(三)昇天は我らの主をして、超越的地位にありて萬世に亘り、萬民の爲に活動することを可能とならしめた。

昇天は眼にて見たてまつる御姿の、地上より永久に撤去せられしことを意味す。されどこれは必ずしも、主は人間を離れて、全然無交渉、無關係となりたまひしことを意味しない。

我らの主は地上にありては、其存在も、其活動も、其時代と其場所とに制限せられて居た。若し世に救主出づるとせば、其時、其所に出づることは當然であつた。何故となれば、神の攝理上、舊約の背景を以て、其所に時満ち、準備が整ふて居たからである。これは人類の救主が他の時、他の所に顯はれなかつた所以である。されど一旦「昇天」の後には、其靈的にして超越的地位にありて、時代と場所とに制限せられず、萬世に亘りて、萬民の爲に救主として活動したまふことは可能となつた。

然るに新約聖書の提供する證明によれば、先入的偏見よりして恣に其記事を取捨せざる限り(これは建設的の聖書批評學者の爲す所でない)本來、人なりし者が、神とせられし形跡はない。神の特別のインビレーションを受けて「神の價値」ありとして尊崇せらるに至りし證左はない。其示す所は「上よりのキリスト」にして「下よりのイエス」でない。「歴史のイエス」はキリストの人格的存在の全部でない。歴史のイエスの前に、永遠に在す御子としての存在あり、歴史のイエスの後に、永遠に在す大祭司——十字架の上に成し遂げたまひし贖の功德を以て、限りなく我らの爲に取り成したまふ主、聖靈によりて教會と我らの爲に活動したまふ活ける主がある。これは現在のキリストにいます。此

現在の主と接觸を保つものをくりすちやんといふ。

かくてベツレムはカルバリを豫期し、カルバリの後にイースターあり、イースターの後に昇天となる。基督教眞理の四環は相連て居る。

五、『イエスは神の右に擧げられ、約束の聖靈を父より受けて汝らの見聞する

此ものを注ぎ給ひしなり』(徒二の三二)

これは五旬節に於ける聖ペテロの説教の一節である。

(一)「約束の聖靈」とは何乎。これは主が世を去りたまふ前に確かと弟子たちに約束したまひし所のものである。「我、なんぢらを孤兒とせず、汝らに來るなり」(ヨハネ十四ノ十八)。「聖靈汝らに臨むとき汝ら能力を受けん」(使一ノ八)。従て公會の信經は「我は聖靈を信ず」といふ。

聖靈降臨日の特禱には

神よ此節に方りて、聖靈を降し、その光をもつて、御民の心を照らし給へり。

と云ひ、當日の聖餐感禱にもいふ。

此時、われらの主イエス、キリストの誓約に應じて、聖靈の降臨したまへることを感謝したてまつる。

聖靈降臨の結果、弟子等は「能力を着せられ」た。此「能力」によりて、天下にキリストの證人となつた。かくて教會は誕生した。

(二)聖靈は「他の助主」にしています。「我去らずば助主なんぢらに來らじ」(二ヨハネ十六ノ八)。「助主」(イエス、キリスト)の現に尙此世に在す間は、「他の助主」降り得なかつた。又其必要もなかつた。地上にいませしときイエスキリストは實際「助主」にいました。悲めるもの悶めるもの病める者等皆主の御許に來りて助を受けた。従て目にみゆる助主の此世に在す間は、目にみえざる助主——聖靈は降り得なかつた。「イエスまだ榮光を受けざれば、聖靈未だ降らざりしなり」と第四福音書記者の註釋も其意である。

(三)聖靈は眞理の御靈にいます。『眞理の御靈のきたらんとき、汝らを導きて眞理を悉く悟らしめん』(ヨハネ十六ノ十三)。弟子等は三年間、我らの主イエス、キリストと起臥を共にすることによりて、キリストを神と知るに至つた。正しき意味に於て「神の價值」を有ちたまふことを信じ、『我が神、我が主』と信認するに至つた。然るに主は自身を「子」と呼び、神を「父」と呼びたまふた。主は又去世後に聖靈を遣りたまふた。聖靈はイエスの御靈にして、一のパーソンにいます。其指令はイエスの指令であつた。初代教會はイエスの命令と、聖靈の命令との間に區別を爲さなかつた。

(註)故フランシス、ゼ、ホール博士いふ「使徒時代教會は、キリストによりて任命せられし所のものと、聖靈によりて任命せられし所のものを區別する必要を感じなかつた」(F. I. Hall, The Church and Sacramental System. P. 123, note)

然るに神は唯一である。弟子らの信仰によれば嚴密に唯一である。されど弟子らは父も、子も、聖靈も、神にしていますことを經驗した。然らばこれらは唯一の神格に於ける三位——三のパーソンの區別なしと知るに至つた。これはやがて三位一體の教義となれるものである。「三位一體」なる術語は新約聖書にない。されど三位一體の事實はある。故ゴア監督はこれを「含蓄的三位一體の教理」と稱して居る。

(註)C. Gore: Belief in Christ, Ch. VIII.

右稻垣譯本「キリストへの信仰」第八章參照。

初代教會は此聖靈の指導の下に其創成を見、又其發展を遂げた。今日といへども同様である。地上に在せし我らの主の時代は遠く二千年前に過ぎ去つた。親しく御足を印したまひし聖地を巡禮して、或はガリラヤの湖畔に佇み、或はオリブの山頂に立つとも、主を拜することはできない。山水徒らに残りて、主の御姿は存しない。げに今は聖靈の御代である。我らの主は今や聖靈によりて活動したひつゝあるのである。

此に基督教眞理の第五環がある。五環相連り一を他より離すことはできない。

六、「天の下には我らの頼りて救はるべき他の名を人に賜ひし事なければなり」(使徒行傳四ノ十二)

されば若し「言は肉體となりて我らの間に宿りたまへり」——神、人性をとりて、人間の歴史に入りたまひしとのことは、新約聖書の證明するが如くに眞實なりとせば、此「人格」——イエス、キリストによりて與へられし啓示以上に、神に關する完全なる啓示はあり得ない。従つてイエス、キリストを知るは父を知ることである。其結果、世界に於ける宗教眞理の如何なる要素にも勝れるものは此にあることとなる。言換れば、此に必然的に竟極的宗教は存することとなる。従て我らは「他に待ち」得ない。我らは他の「キリスト」を待ち望み得ない。又他の「キリスト」とてはあり得ない。かの人格——ナサレのイエスこそ宇宙の王座に坐したまふものなれ」(ゴア)。キリストの人格に關するこれ以下の如何なる評價にても、キリストの竟極性を要求し得ない。「言は肉體となれり」との教義以外に、キリストに歸せらるゝ此終極性と特異性とを説明し、若くは正當視するものは他にありと思はれないイエス、キリストの名の外に「天の下には我らの依りて救はるべき他の名を人に賜ひしことなければなり」

(註)C. Gore: Belief in Christ, pp. 316—7. 稻垣譯本「キリストへの信仰」四七四八頁

基督教はキリストの人格と生涯と死と復活と、昇天と其在天の活動とより成る。キリストを別にし

て、基督教はあり得ない。而かもキリストにして、教會が教へ、新約聖書が證明し、歴代無數のくりすちやんが體驗し來れる如く「肉にて顯はされ」たまへる「神の眞像」にて在ますとせば、其キリストの宗教も亦竟極的——絶對的であらねばならぬ。

要するに基督教の絶對性は、キリストの人格の絶對性に存す。キリストの人格の絶對性は「父の獨子」——御子が、人性をとりて世に現はれたまひし故のみ。これぞ實に人類の救贖を可能ならしめし神の測るべからざる愛の大ドラマである。これぞ實に人生の秘義を開くべき神より與へられたる鍵である。げに人生の一切の問題の竟極的解決はイエス、キリストに存する。

七、『我が主よ、我神よ』(ヨハネ廿ノ二八)

然らばイエス、キリストを信ずとは何を意味するか。

これは單に福音書其他新約諸書に基きて、智的にキリストと其事蹟を知ることのみを意味しない。これはトマスの如く『我主よ、我神よ』と生きて在す主に禮拜をさしげ、忠誠を挺んずることである。然らば敢て問ふ。現代人は宗教を追求し、イエス、キリストと其事蹟に興味を有つに係らず、何故に眞にキリストに歸依する者少きか。

少くとも其理由の一は明白である。世の所謂「イエス」傳——基督論に過られて居るからである。

即ち一種先入的偏見により、超自然的分子を抜きたるキリスト、宗教的天才にして、神の父なることゝ、人類の同胞たることを説きしイエス、神より特別のインスピレーションを受けて「神の價値」ありとせらるゝに至りしイエス、人より出で、地に住み、地にて、十字架上に死を遂げ、犠牲の模範を垂れしイエス、所謂「世界の三聖人の一人」たるイエスに満足し得ざる爲である。若し此種のイエスならんには、これは最終のものにあらざれば、我らは他に待たねばならぬからである。即ち「死にし者ども」のうちに數へらるゝ「イエス」に歸依し、忠誠を表さんなどは思ひもよらざることであるからである。

基督教會最初の殉教者ステパノは、臨終に天を仰ぎて主イエスを見『主イエスよ、我靈を受けたまへ』と祈つた。祈を受くる者は神の外にはない。死せる者には祈り得ない。主は生ける神にていませばこそかく祈り得たのである。

基督教會の大迫害者たりし聖徒パウロの回心の事實は、心理學的に簡単に説き去るにはあまりに超自然的の事件である。彼はみづから主を見奉りしとす。人生知己に感ず。況んや、主より特召を蒙りたるに於てをや。彼は其死に至るまで徹頭徹尾、主に忠誠を盡した。人は死せる者に献身することはなす。

爾後、教會の歴史は發展して此に二千年、無數のくりすちやんと、多數の聖徒は、此の生ける主に歸依し、誠忠を表して來た。現に然か爲して居る。今後も然るに相違ない。此に基督教弟子道の要諦がある。

第二講 恩惠の施設

一、恩惠の本源はイエス、キリスト

「眞理」はイエス、キリストによりて來れるが如く、「恩惠」も亦イエス、キリストによりて、世に來た。

「恩惠」とは、元來、基督教用語にて、無償にて人間に與へらるる神の靈的賜物をいふ。「凡ての善き賜物と、凡ての全き賜物とは、上より、もろくの光の父より降るなり」(ヤコブ一ノ十七)。そのもろくの賜物の中、最も尊き、最も難有き大なる賜物は、イエス、キリストを世に遣りたまふたことである。此イエス、キリストは恩惠の本源にています。

(註一)故ゴア監督の絶筆「リタリー瞑想」中にいふ。

此の恩惠とは何か。かく翻譯せられて居る原語のギリシャ語は、何事によらず、凡そ美はしき「優雅なる」事物、資質、若くは行動と、これによりて生ずる反應的の感恩感謝の念を意味した。

舊約聖書にありては、此語は特に上長者が下級者に對する寵愛若くは好意を意味した。從の神の人に對する寵愛若くは好意を意味した。

新約聖書にありては、此語は(特に聖徒パウロの愛用せるものなるが)イエス、キリストによりて表示せ

られたるが如く、ユダヤ人たると、異邦人たるとを問はず、其間の障壁を撤廢せる神の普般的好意を表示する語となつた。——「凡ての人に救を得さす神の恩恵」(テスト二ノ十一)は、イエス、キリストによりて來れる「恩恵」である。

然るに教會歴史上、特に拉典語の翻譯にありては、恩恵(*gratia*と譯せらる)は稍新意義を取るに至つた。即ちこれは超自然的の能力——(殆んど聖靈の作動と區別せられて居ない)——にして、新生活を送り得せしむる爲の教會の特殊の資能を意味することとなつた。従てパプテスマの特殊の恩恵、信徒按手の恩恵、聖餐の恩恵など稱するに至つた。又謙虛の恩恵、忍耐の恩恵などといふことをも耳にするに至つた。(C. Gore: *Reflections on the Litany*, p. 67)

(註二)「恩恵」の聖書的神學的の意味並に其歴史的沿革等に關しては、信仰職制世界大會繼續委員の任命せる神學委員(基督教各コミュニティの専門の神學者十六人)の本年一月發表せる研究論文集「The Doctrine of Grace」參照。Student Christian Movement 發行菊版三百九十六頁。特に卷頭にある該委員の「報告書」參照。

此恩恵は神の愛と、神の赦に於いて、最も著しく顯はされた。

イエス、キリストは神の愛を啓示したまふた。「神は愛なり」。其教に於て、其行爲に於て、これを啓示したまふた。イエス、キリストは實に神の愛の權化にいたしました。イエスの風格に接するは、神の愛に接するのであつた。イエスの教を耳にするは、神の愛のメッセージを耳にすることであつた。イエスの一撫は神の愛の接觸であつた。イエスの一眺は、神の愛の表現であつた。「普くめぐりて、善き

ことを行ひたまひし」とは、其地上三年の宣教生涯が到る處、神の愛を其業に示したまひしことを語るものである。

神の恩恵は又神の赦として、イエス、キリストによりて示された。

赦は人の要求する所のものである。人は赦されんことをねがふ。罪の念に苦めらる事ほど、人に苦きことはない。イエス、キリストは信仰あり、悔心のある處、此赦を人に與へたまふた。「汝の罪赦さる」。罪を赦し得るものは唯、神のみ。イエスは此赦の歡喜を與へたまふた。

神の赦は神の愛の一形相である。

而て最後にイエス、キリストは、十字架上に、萬世に亘り、萬民に、最も深き印象を與ふる形式に於て其最後を遂げたまふた。これは神の愛と神の赦の最も有力にして、かつ最も有効なる表現であつた。

十字架は奥義である。恐らく神の外には、何人も其意義を窺ひ盡し得ないであらう。されど一事は明白である。即ち神は此絶大なる犠牲によりて、人を罪より救はんとしたまひしことである。これは實に神が天地の間に行ひたまひし歴史上無比の人間恢復のドラマの絶頂であつた。「キリスト、イエス

罪あるものを救はんが爲に世に來りたまへり』(テモテ前一ノ十五)とこの成就を此に見た。

さりながらこれは單に歴史上の一大悲劇なりしといふに止らて居ない。『われ若し擧げられなば、萬民を引ききて、我に來らせん』と預ねて仰せたまひしが如く、イエス、キリストの十字架は速刻より其偉力を發揮し初めた。萬民は此十字架上に示されし神のめぐみ——愛と赦とに引かれて、其下に跪伏して、罪の赦を得た。從て心の平安を得た。又現に得つつある。今後も然るに相違ない。

然るに神の愛の絶頂たるイエス、キリストの十字架は、人間の歴史上、一定の時と一定場所にて、後にも、前にも、唯一回生ぜしものにて、これは反覆せられない、又反覆せらるべきものでもない。されど其功德は、世に人の存する限り、萬世に亘りて、萬民に及さるべきものである。

然らば如何にして何處に、十字架の功德を人に施し得るか。「教會」は即ちこれが爲に、神の立てたまひし機關である。

二、教會の成るまで

基督教は初より一の「社會」——教會として、世に出現した。一の宗教思想として、世に紹介せられたのでない。人が初めて基督教に接した時、基督教は教會の中にあつた。畢竟、これは初よりイエス、

キリストの思召であつたからである。

イエス、キリストは其宗教を書物の上に立てんとせず、生ける人格の上に建てんとしたまふた。

これが爲に其の宣教生涯の當初に於て、先づ十二人の弟子を選び、これを使徒として、三年間起臥を共にし、或は教説により、或は其業により、又最も多く其人格によりて、彼らを教養して、將來、世に出現すべき「教會」の萌芽とならしめたまふた。

彼らは多くは素朴の人々であつた。「神のもろくの徳は形體を爲して宿れる」「神の眞像」にていま「人格」の感化を受けて、遂に『汝は活ける神の子』『我が神、我が主』と全信任をイエスに表示し、一身をさゝげて、忠誠を挺んずるに至つた。

かくて其世を去らんとしたまふに當り、彼らの爲に將來の設備として、聖靈を與へ、教會統治に關する權威——罪を赦し、罪を留むる權威を授けたまふた。

又世の終まで彼らとともに在すとの約束を與へたまふた。又一般に救の爲に必要なりとして、二の聖奠を立てたまふた。一は父と子と聖靈の御名によりて施さるべきバプテスマである。他は『我記念の爲に行へ』と命じたまひし十字架の上に於ける天下萬民の爲の罪の贖の記念の祭たる聖餐である。

此二つの聖奠は將來形成せらるべき教會に於て「恩恵をうくる法」として行はるべきものであつた。

(註) 聖餐はキリストによりて直接に立てられし一般に救に必要な此二のもの外にも、聖靈の指導の下に、使徒たちによりて實行せられし他の聖餐もある。信徒按手、結婚式、聖職按手式、懺悔式、抹油式である。稻垣陽一郎著「さんらめんと」(六三—七三頁)第三章五参照。

以上は教會建立に關するイエス、キリストの思召と其保障を與へたまひしことを示すものである。

やがて此約束の聖靈——『聖靈、なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん』との「イエスの御靈」は、五旬節に降臨した。使徒たちこれによりて力を得て、イエス、キリストの死と復活を説き、信仰と悔改とによりて罪の赦を受くべきことを告げ、其結果、改宗して、洗禮を受くる者、多數生じ此に教會は事實として出現した。

此教會にキリストの教は保存せられ、キリストの立てたまひし聖餐は行はれ、キリストの命じたまひし道徳が實踐せらるることとなつた。

かくの如く教會は初より一の社會であつた。神立の社會であつた。人は此に神より招き入れられるのである。人が便宜上、團結して作りし宗教的修養の爲の會合でもなく、若くは社會改善の機關でもない。教會はあくまでもキリストによりて來れる「恩恵のホーム」である。

これは神立の唯一の聖なる社會にして、普公的のものである。即ち時代を超越し、場所を超越し、人種を超越し、國境を超越して居る。信經に「使徒よりの唯一の聖公會」とあるは即ちこれである。

これはキリストの使徒たちより連綿として今日まで繼續し來れるものである。其間幾多の迫害に會つた。幾多の反對を受けた。幾多の壓迫も加へられた。されど教會は依然として其存在を繼續し來り、益々擴大して來た。キリストの御靈によりて内住せられたる神の教會は、人間の暴力では破壊せられ得ないからである。

勿論、地上に於て教會員を構成するものは、人間——弱點も缺點もある人間の故、教會の永き歴史上、幾多の過失も生じ、幾多の腐敗も生じ、幾多の異端もあらはれた。されど御靈の統制によりて、其都度矯正せられ、改善せられ、訂正せられて來た。今後も然るに相違ない。

然るに人間の弱點を暴露したるは、教會の分立と分裂である。イエス、キリストの教會は唯一である。幾個もある筈はない。新約聖書には「諸教會」なる複数が用ひられて居る。これはキリストの唯一の教會のコリントに於ける教會、エペソに於ける教會、ガラテヤに於ける教會の意味である。これらの諸教會は皆各別々のキリストの教會の意味でない。

その如くキリストの教會は或は歐洲に、或はアジアに、或はアメリカに、或はアフリカに、或は濠洲にも發展する。されど同じ一のイエス、キリストの公會の肢體であらねばならぬ。然るに教會の歴史上、中世の初め先づ東西に分立し、更に十六世紀に宗教改革の際、歴史的の公會より分離せる幾多

の分派を生じて今日に及んで居る。これは分割すべからざる唯一のキリストの教會を分割せるものにて、神に對しては罪であり、世に對しては耻辱である。

これは一日も早く再びもとの一に還らさねばならぬ。これぞ實に近時教會レユニオン運動の勃興せる所以である。われらは皆これが爲にいのり、これが爲に相當の努力を爲さねばならぬ。

然るに教會の現状は以上の如きにも不拘、教會——使徒たちよりの聖公會は、「恩惠のホーム」として世に立て居る。人間の靈魂の救に必要な神の恩惠の設備は此にのみ存する。救を受けんとするには教會に來るの外ない。此意味に於て「教會以外に救なし」。昔も今も今後も其通である。

(註)神は全能にして全愛にいます。故に若し必要あらば如何なる方法によりても、人を救に入れ得たまふ。されど通常、人が救を受くる道は教會にのみ設備せられて居る。

三、教會成りてのちは

一旦教會成りてのちは、教會は恩惠の施設所——「恩惠のホーム」として世に其職能を發揮して居る。「キリストは肉にて顯はされ」て世に來り、十字架の上に、其尊き血を流して、萬民の爲に贖罪を成就したまふた。其功德は如何にし人に適用せらるるか。其方法は如何。

(一)これは聖奠^{サクラメント}である。

「聖奠は我らに賜ふ靈なる恩惠の徴證なり。キリスト自ら之を建て、此恩惠をうくる方法として又この恩惠を賜ふ證となし給へり」聖奠には、「目に見ゆる外の徴證」と「靈なる内の恩惠」がある。

(二)何故に神は此種の方法を採りたまふたのであるか。

これは神の深き思召のある所にて、神がめぐみを與へたまふによりて、われら人間にとりて最も善き方法であるからである。

元來、聖奠の原則は二のことを前以て假定して居る。一は人間は靈魂と身體との二重性の存在であることである。他は從て神は其目に見えざる恩惠を人に賜ふに當りて、目に見ゆる或事物を用ひたまふとのことである。

故に若し人間は唯、靈魂のみ存在なりしならんには、此種の聖奠の必要はなかつたであらう。神は其の靈の恩惠を直接人間に與へたまふことなるからである。然るに人間は現に精神的活動の機具として身體を必要とし、又思想發表の爲に、言語、文章、舉動等を用ふるとせば、神が人に靈の恩惠を賜ふるに當りて或事物を仲介として用ひたまふとも決して怪むに足らぬ。却て其當を得たるものなりと察せらる。加之、此種の方法によりて、神のめぐみの人間に與へらるる場合、これを受くる者にとりては、最も適確にこれを體得することができてからである。即ち何時、何處で、如何にして、神の特殊のめぐ

みに與かりたるかを知り得るからである。

基督教の依りて以て立つ神の御子が肉體をとりて世に來りたまひしことも、畢竟、此原則を是認せるものにして、教會の聖奠制度は、此インカーネーションの延長にして、又其應用に過ぎない。

されば教會の聖奠組織は、人間自然の要求に應ずるものにして、其合理性と必要性は、過去二千年間の無數のくりすちやんによりて證明せられて居る。

基督教は勿論、最高の意味に於て靈的の宗教なれども又聖奠的宗教である。

然るに世には、聖奠は一種の機械主義なるかの如くに非難し、物質を用ひて、靈のめぐみが招來せらるるなどとは一種の魔術の類であると冷罵するものもある。

決して然うではない。聖奠は器械主義でもなければ、魔術でもない。使用せらるる物質は。勿論靈的功力を生ぜしめ得ない。これには聖靈の作用が伴ふて居る。聖靈がこれを用ひて神のめぐみを人にもたらしたまふのである。

加之、聖奠にはこれをうくるものの信仰が期待せられて居る。信仰のなき所には、神の恩恵が作用せられやうがない。

(註) 稻垣陽一郎著「さくらめんと」二五五〇頁参照

(三) 聖奠の執行者は神立の聖職である。

聖奠は神立の「恩恵を受くる法」なりとせば、これを正當に執行して、正當の功果あらしむる爲には、正當の執行者を必要とする。これは公會に於て神によりて立てられたる聖職である。

聖職は神立の聖奠の神立の執行者である。

公會には古より歴史的の聖職位が設けられて居る。これは三重の職位である。

「聖書と諸般の古書を研究すれば、キリストの公會に、使徒時代より監督、長老、執事の職位ありしこと明瞭なり。而て此職は往古より大に重んずる所にして、何人たりとも、敢てみづから専恣に行ふことを許さず。必ず先づ召され、試みられ、適當なる者と認められ、公禱式と正當なる有權者の按手によりて立てられたる者に限り……」(「聖職按手式緒言」(祈禱書四九一頁))

これによれば公會に歴史上、連綿として繼續し來れる聖職位は三重である。即ち監督、長老、執事である。監督はイエス、キリストの直接任命したまひし使徒の後繼者である。他の二者は聖靈の指導の下に使徒の制定せしものである。此三重の聖職の教會初代より存せしことは新約聖書並に教會古書の示す所である。

天下到る處、苟もキリストの公會の肢體の存する所、此三重の聖職位が嚴存せねばならぬ。日本聖公會も日本に於けるキリストの公會の肢體として、これを嚴守することは「聖職按手式緒言」に證

言するが如くである。日本聖公會は又これを、教會一致に關する「四綱領」の一項として公示して居る。

(註)教會一致に關する決議(第十回總會決議)

日本聖公會は基督敎諸敎派の合同一致を熱心に希望し、左の條項を一致の基礎とせんことを提言す。

(一)新舊兩約書は、救拯に必要なる總ての事を含有し、且信仰を定むる究竟の標準規矩なりと信ず。

(二)使徒信經はバプテスマを授くる標準にして、ニケア信經は、基督敎信徒の信仰を完全に表示したるものと認む。

(三)キリスト親ら制定し給ひし二個の聖奠、即ちバプテスマと主の晩餐を、キリストの用ひ給ひし言語と物質とを用ひて之を行ふ。

(四)歴史上繼續せる監督を承認し、其統轄の方法は、地方の便に應じて之を執行す。

かゝる聖職は聖奠の執行に必要なには、二の理由がある。

一は其執行する聖奠は公會に於て定められたる正當の聖奠たる保證の爲に必要なである。

二は其執行する聖奠は、確に其所定の恩恵を與ふるものなりとの保證の爲に必要なである。

聖奠は神の「我らの賜ふ靈なる恩恵の徴證なり」とて、誰彼の別なく、何人がこれを行ふても功力ありといふことはない。「神の公會に長老たる職に任」ぜらるゝものに、此權威は授與せらる。長老按手式に於て、キリストより選ばれたる使徒の後繼者たる監督——即ち人を聖職に按手し得る「正當なる有權者」より「汝の預る教會に神の言を宣べ、聖奠を行ふ權威を授く」とあるは即ちこれである。

かゝる權威を與へられたるものによりて執行せられたる聖奠こそ、正當の聖奠にして、神がこれらによりて與へたまはんとする恩恵が正當に與へらるゝのである。

(註)勿論、聖職自身は聖奠によりて與へらるる恩恵を製出するのではない。聖奠は通常 *ex opere operato* (through the act performed) に作用す。「行はれたる行爲によりて」作用す。即ち聖奠は規定通りに執行せらるるに於ては、正當に作用す。之は聖奠の能力は何ら人間的事によることなく、全然神の意志によることの意味である。之は聖奠は魔術的作用することでない。聖奠に於て實切に作用するものは、聖靈にいてます。聖職は唯其器たるに過ぎない。

稻垣陽一郎著「さくらめんと」(四六一—四七頁参照)

四、教會はわれらの「靈の母」

教會は其「存在理由」^{レイゾン・デートル}よりして、信徒に對しては「靈の母」として行動する。即ち信徒が此世に生れてより、死に至るまでの此世の信仰の旅路に於けるあらゆる程次に、我らの靈魂の世話を爲す。人間の生母は通常共子女に先ちて逝くが故に子女の臨終に子女の世話を爲し得ない。然るに「我らの靈の母」としての教會は、我らの臨終並に死後の爲にも世話を爲す。

(一)生れし嬰兒を受けて、教會は先づこれに洗禮を授くこれによりて自然的誕生によれる父母の子を、超自然的の誕生によれる神の子とならしむ。此格式——神の子供の一人としての格式は、此世の

全生涯のみならず、來世にまでも續く。

此洗禮は神のめぐみの初受である。洗禮は基督教組織に於ては、其以後の神の一切の恩恵を受くる基礎的條件である。洗禮をうけしものにあらずば、其以後の聖餐を受くる資格がない。これは救に入るに必須條件として、我らの主イエス、キリストによりて欽定せられし方法である。人間の工夫思索の所産でない。故に洗禮を受くることは絶対に必要である。

(註)聖公會大綱第二十七條にいふ。「幼き小兒の洗禮はキリストの制度に最もよく適ふものなれば、教會に於ては是非とも保留すべきものなり」。然るに世には一部の人々の間に、幼年洗禮を否認せんとするものがある。稻垣陽一郎著(さくらめんと)一二八—一三一頁参照。

(二)やがて幼兒成長して、青年機に達するや、此身體的にも、又精神的にも、極めて重大なる時機に直面せるものに、最も必要とする聖靈の賜物を受けしむる爲に、教會はこれに信徒按手を授く。

此聖餐によりて、青年期に入らんとして、激烈なる内外の誘惑に直面せんする者に、智慧、聰明、智識、善謀、剛毅、敬虔、主を畏む靈を與へて、靈的に充分武装せしむ。

(三)信徒按手を受けて、一人前の充全なる聖公會員として資格成りてのちは、教會はこれを受聖餐者として、聖餐に與からしむ。

聖餐はイエス、キリストが救に必要なりとして、自から立てたまひし聖餐の一である。故に洗禮によりて救に入れるものは、其救を全ふするに必要なめぐみと力と助とを得ん爲に、常に聖餐に與からねばならぬ。

聖餐に關しては我らの知らねばならぬこと夥しい。されど少くとも、其二の方面は何人も明瞭に心掛けて置かねばならぬ。

一は「記念の祭」としての方面である。教會はこれを我らの救主イエス、キリストが、十字架の上の死によりて、天下萬民の爲に萬世に亙りて成就したまひし贖罪の記念の祭として、感謝と讚美とを以て、これを神の前にさゝぐ。故にこれは教會が神にさゝげ得る最高の禮拜、中心的禮拜にして、苟も長老の定住する所にありては、少くとも毎主日毎聖日にさゝぐるこの要求せられて居ることは、祈禱書に、毎主日毎聖日等の特禱、使徒書、福音書が設備せられてあるにても明瞭である。信徒としては常に此大禮拜に参加せねばならぬ。

二は陪餐^{コミユニオン}の方面である。聖餐に陪することによりて「信する者は靈にて、眞實に」キリストの體と血を受け「我らの靈魂健かなること、我らの體がパンと葡萄酒の養を受けて健かになるが如く」である。之は我らの信仰の旅路の糧である。これは實に我らにとりて、無上の特權である。「全能の

神、天の父、其の御子救主イエス、キリストを與へて、我らの爲に死なしたまひしのみならず、此聖奠によりてなる糧となしたまふことを心の限り感謝したてまつるべし」(祈禱書二六四頁「豫告」)。これによりて我らは力を得、慰を得、助を得、勵を得る。

(四)やがて一家を營まんとして、一人の男と一人の女が結婚せんとするや、此人生の最大慶事たり同時に人生の最も重要時機に際し、結婚式並に結婚聖餐式を行ひ、教會は國法の手續を了して正當に結婚せんとするを者立證し、これに神の祝福を與へる。

而かもかくて結婚するものは、神と人の前にキリストの定めし結婚の尊き原則を守ることを誓ふとともに、又これを公に發表するものである。

こゝに一夫一婦の嚴重なる原則の正認がある。夫たるものも、妻たるものも、ともに人生の如何なる場合にも互に愛し、互に譲り、死に至るまで相手を保つとのことである。一旦結婚してのちは、唯死のみ自然的に此結婚なる繫を解除す。それ以外それ以下の如何なる理由も、原因も、此結繫を解消するものはないとのことである。「神の合せたまへる者は人これを離すべからず」との司式者の宣言はことを重大事を意味して居る。

基督教結婚の高貴なる理想と標準は正に以上の如くである。當今低級亂雜なる性思想と、性的亂行

の横溢する間において、益々此點を發揮せねばならぬ。

(六)やがて出産あらば、教會は産婦をして教會に於て、産後感謝をさゝげしむ。

婦人子を生みて肥立ちたるとき相當の衣服を着けて禮拜堂に來り定式の場所に跪く、會師本人に向ひ左の如く言ふべし。

全能の神は大なる恩恵をもつて汝を護りて安産せしめたまへり。故に今眞心を以て感謝し奉るべし。

子供は神の賜物である。大なる賜物であるとは聖書の思想である。これは一家の私事に相違ない。

されど結婚式を教會にて擧げし以上、出産後、肥立ちて、外出し得るに至れる第一の機會に、神の聖堂に於てこれが感謝を公にさゝぐることは當然のことである。

(六)不幸にして病にかゝらば、教會は聖職を遣はして病者訪問式を行はしむ。

「病人ある時は會師に通知すべし」(祈禱書四三五頁)

病人あるときこれを牧師に通知するは會員の義務である。牧師は親しく病床に本人を訪ね、神の御言を讀みまかせ、又祈を爲す。

又病者聖餐式を行ふ。これは本人病床に横はりて、禮拜堂に於ける聖餐式に列し得ざる際、病中醫藥に劣らず又醫藥に合せて必要に、或場合はむしろ其以上に必要なる靈の慰と力とを與へ、生命の糧に與からしめんとするのである。病者聖餐の如何に感謝すべきかは、多くの受聖餐者の經驗する所である。

分餐辭に「願くは汝の爲に與へたまひしイエス、キリストの體(血)汝の體と靈魂とを限りなき生命に到るまで護りたまはんことを」とあるは注意すべきである。聖餐に於ける賜はる恩恵——生命の力は單に靈魂にのみならず、靈魂の活動の機具たる身體にも與へらるゝことを示す。

(註) 數年前、久しく身に輕からざる病あり。體力衰へ、意氣昂らず、靈魂も亦寂寥を覺えんとせしとき、「我に能力を賜ふ主キリスト・イエス」「われと偕に在して我を強めたまへり」とのことを實感せしが「病床聖餐」を受け、頓みに主より力と慰とを覺え、後に左の拙作となつた。

一

身はつかれ

魂はさびしく

やまひしのとこに

うれひなやみて

主をよばふ

二

「屋根の下に

入れまつるには

おそれおほきも」

主のほかわれに

たすけなし

三

「汝が家に

今宵やどらん」と

のたまひし主よ

いやしき身にも

のぞみませ

四

罪をくひ

心きよめて

かしこみうくる

永遠の生命の

靈のかて

五

『とこしへの

いのちにいたる』

『不死の藥』に

魂つよめられ

身もかろし

(註) 聖餐のことを古『不死の藥』と稱せられた。

(昭和五年四月四日發行基督教週報所載。最近長老山本秀治氏右に用ふる讃曲を新作せられた。)

(七)不幸にして受洗後、罪に陥り、良心の呵責に堪へず。「これを嘆き眞に改むることを決心して、全能の神に懺悔」しても「尙こころ穩かならぬ」時は、牧師若くは他の長老に「往きて、其憂を陳べ」しめ、かくすることによりて「教訓と慰藉を受け、疑惑を去り、良心安んずることを得せ」しむ。(同三六六—七頁)これは平生のことである。病氣にて病者訪問式の行はるるときにも同様の勸告がある。(四四〇頁)若し病者、何等かの事により、心自ら責めて安からざること有らば、仔細に罪を懺悔するを勸むべし。其人懺悔して切に願はば長老「赦罪を告ぐべし」

罪の責苦に惱みて、日夜不安と憂愁に沈むものにとりては、此懺悔式こそ誠に溺れんとする者に投

げ與へられたる助の綱である。一旦懺悔して、赦罪を受けてのちは、久敷續きし陰鬱なる入梅の空、からりと晴れ渡りたる心地となるであらう。

これも亦「靈の母」たる教會が、其子供の爲に設備したる神の慈悲ふかき設備である。

勿論、聖公會に於ては、祈禱書規定の明記するが如く、このことは任意的にして強要的でない。

(八)病篤き場合、教會は病者の爲に抹油式を執行する。醫藥の最善を盡くすべきは勿論なれども、醫藥の能力には限がある。されど人力の及ばざる所、神の大能の作用する餘地がある。聖徒ヤコブが其書中に

汝らのうち病める者あるか、その人、教會の長老たちを招け、彼らは主の名によりて其人に神を塗りて祈るべし(ヤコブ五ノ十四)

と勸めし以來、教會は抹油式を、病人の爲に執行して來た。これによりて醫藥の到底如何ともすべからずとせし重病人の全快に赴ける例は決して稀でない。

如何に自然科学の進歩したる今日にても「生命は生命より出づ」、生命を司どりたまふものは、全能の神だる以上、我らは人事の最善をつくしながら尙神に助を求め得る。若し本人が存へて此世に在り、御榮をあらはすことが御旨に叶はゞ、人間が見て望なしとする場合にも、生命の更新は可能である。

これは靈の母が其子供の病に關して爲し得る最終の「恩恵を受くる法」である。

此事を非常時に忘れてはならない。

(九)やがて臨終來らば、教會は臨終の聖餐に與からしめ、「死出の旅路の靈の糧」を與ふ。これは人生の終焉の最重大時期に際し、本人の靈をして、此世より彼世に移る過渡機に善處せしむる爲である。

これに力と助と慰と望と光明を得て、本人は靜かに、而かも確かに、神の召に應ずる。

(十)教會はやがて其遺骸を受けて、埋葬式を行ひ、又埋葬聖餐式を營みて、本人の生涯の故に神に感謝をさぐぐ。

かくて「靈の母」としての信徒に對する此世に於ける教會の最終のつとめは終る。

されど教會は決して逝世者を忘れない。記念日其他に記念式、記念聖餐式を行ひ、絶へず本人を神の前に記念す。逝世者記念を尊重するは基督教の特色の一である。何故となれば「神は死ねる者の神にあらず、生ける者の神に」いませば、神に在りては「死ねる者」とてはなく皆生きて居るからである。唯われらと異るところは、存在の状態のみ。我らは此世に會り、彼らは靈界に在るのみ。

教會に於ける恩恵の施設略以上の如くである。

品答贈スマスリク的好絶

故神學博士 チャールス・ゴア著

刊新最
キリストへの信仰

神學博士 稻垣陽一郎譯
四六版・布裝・箱入
九ボ組(六號入)
四百九十五頁
定價金二圓五十錢

本年早春光茫燦として逝きし、大ゴア追悼の花輪として捧ぐる記念出版!

本書はゴア著作五十種中の最大雄篇として神學界を風靡せし、信仰再建三部作(キリストへの信仰、神への信仰、聖靈と教會)中の隨一傑作としての激賞篇!
壯嚴を極めしウエストミンスター・アビーのゴア記念禮拜式に臨んで、カンタベリー大監督は讃へて曰く「監督、學者、思想家、教師、預言者、聖徒なるゴア!」と。その巨星ゴアの最大著作「信仰再建三部作」(キリストへの信仰、神への信仰、聖靈と教會)の翻譯權は、彼の生前彼の親交ありし稻垣博士のみに特約されてゐた。故に巨星の計一度傳はるや、稻垣博士は巨星に對する知遇の感激に燃えつゝ本書の譯出に其全精神を傾倒したのである。而して其尊き努力の結晶は今や燦然として諸君の前に輝いてゐるのでないか。
見よ! 何と力ある筆の運び! 否、巨星の魂の躍動! 全頁に漲る迫力! 試みに緋け! キリストの人格に對するあらゆる論證を列擧網羅して之を明確に批評裁量し、インカーネーションに關する傳統的信仰を高調して、迷想に囚はれたる知識階級の夢を覺ますと共に、自由檢討の分野にも正しき進路を指示した驚くべき巨星の指導力!

エイ・エフ・ジョンストン著 稲垣文子譯 モール夫人閱

刊新最

みかげを慕ひて

四六版・布裝
華美裝
原色挿畫多
定價二圓

世にも巧みに描寫せる四福音書の横額!

主イエスと同時代に生れたヨエル——それは主のみかげを慕ひ行く可憐な少年である。不遇の子よ、數奇を極めし運命のまに、彼の痛める魂が慕ひ寄りし君や誰? 嘘べつレムよりナザレへ、ガリラヤよりエルサレムへ、斯くして彼の君は遂にゴルゴタへと辿り給ふ。げにや明暗變轉の舞臺道! 見よ、救主基督を綽としてヨエルを経として、織細純美に織出されたる絢爛極彩色の繪巻物! さながら四福音書の側面觀であつて、至妙を極めしプロットは、讀む者をチャームしないでは置かない。舊約時代のユダヤの全貌——人情風俗、習慣、地理、風物一切を、よくも斯く迄眞實的に表はし得た物だと、専門家に讚嘆されてゐる本書が、讀者總ての靈的興趣を何として燃え立たせないで置かうか!

東京市麻布區木町二番四聖公會出版社
電話七七八〇番

「恩恵と眞理はイエス、キリストによりて來れるなり」眞理と恩恵、基督教體系に於ける信仰と實踐の兩方面——この兩者こそ苟も聖公會員たるもの、皆相當に心得おくべき所のものである。若し以上の試みし再吟味によりて、多少、此點の諒解に資する所ありしならんとは、講者の至幸とする所である。

LIBRARY OF RECONSTRUCTION OF BELIEF
NO VII. DECEMBER, 1932.

“GRACE AND TRUTH
CAME BY JESUS CHRIST”

—TWO LECTURES ON THE CATHOLIC
FAITH AND PRACTICE —

By

The Rev. Yoichiro Inagaki, S. T. M., D.D.



Issued by

THE SOCIETY OF ST. ATHANASIUS

1612 Ikebukuro, Tokyo.

Sold at

The Church Publishing Society,

24 Zaimokucho, Azabu, Tokyo.

Price 45 Sen.

終